

三月六日

今、九時前、八時二十分発の「はやて五号」で青森県八戸に向かっている。二月末に大雪で北海道に閉じ込められて、行く事がかなわなかった下田町を訪問する為に。昨日は朝から晩まで大学に居た。レヴィ・ストロースの悲しき熱帯、第 巻をまだ読んでいたのだが、要するにこの本は民俗学者とは何者なのだろうかという彼の独白であり、その独白の表現なのだ。

宮本常一、姫田忠義という大きな民俗学者を少し計り知っている。姫田さんはレヴィ・ストロースの研究所に所属していた。その姫田さんから、アイヌ、沖縄、バスク民俗の血液には同根のモノがあるという話を聞いた。十勝と沖縄の仕事をしようとしているのはそんな体験もあるからだ。民俗学と歴史学は現代に於いて、つまり、情報の惑乱状態の中にある社会では、明快な焦点を持つ中心である事は間違いない。哲学と共に最後尾の、しかし前線に立たぬ事が不可能な思想の形式にならざるを得ない。要するに、いずれ存在しなくなってしまう人々や、モノの側に立って考えようとする人々の事なんだな。歴史家、民俗学、あるいは哲学者というのは、消えてゆくモノや人や出来事を消さぬのが歴史学であろう。それは、つまり、消さぬ事によって作るという一見最後尾に映らざるを得ぬ創作である。私が建築設計を介して今やろうとしている事も実ワ同じ事なのだ。アノ東京オリンピックの少し前にアジア大会というのが東京国立競技場で開催された。当時、

中学生であった私は学校に動員されて、見物に出掛けた。スポーツにはあんまり関心が無かったからつまらぬものであった。ただ一つだけ鮮烈に記憶に残って消えぬ光景がある。一万メーター競争であったか五千だったか、何人も選手達がグルグル、トラックを周っている内に、誰がトップなのか、ドン尻なのか解らなくなってしまうた。しかし、時間が経ち、自然に競技は終わろうとしていた。しかし、何処か、アフリカであったか、東南アジアであったかの選手が一人走り続けているではないか。背中につける箸のゼッケン(番号)がお尻に垂れ下がっていたのを覚えている。何だあれは、とガキだった私は思った。満員の観衆もあきれ返っていたように記憶している。ヤレヤレ、もうゴールがこのピリはと思つたら、更に、一周、又一周と、この何処の国の者かも知れぬ選手はそれから何周もトラックを廻つた。一周遅れどころじゃ無かつたのだ。国立競技場はシーンと静まり返つた。しかし、やがてそれでもゴールはやってくる。マア、終わりは俗っぽく、万雷の拍手、という事になったのだが・・・。歴史学、民俗学、哲学というのはこれなんじゃないか。これというのは何周も遅れて終末には単独になつてしまいがら走り続けて、競技場(社会)にとつては遅れ過ぎる事によって単独に視えてしまう状態。しかも、万雷の拍手という俗な観客も居ない。皆競技場から帰つてしまつていて。でも、観客の何がしかは帰つてしまつてから、不思議な後悔にとらわれ始める。まだ、アノ、何周遅れも解らぬ人間は深夜のトラックを走り続けているのじゃないか。そう思う人間の数は決して少なくはないだろう。歴史、民俗、哲学というのはそういうものなんじゃあるまいか。今、十時二〇分位かな仙台に到着しようとしている。途中、降雪のため、新幹線は停止した。飛行機を選んでいたら、又、下田町には辿り着けなかつたかも知

れない。しかし、汽車は大分遅れている。一周遅れくらい遅れている。もしかしたら、万が一、再び雪の中に閉じ込められるのかの期待が浮かんでは消えている最中である。

再び妄想の世界へ戻る。建築設計は現実社会の中では当然、実利の世界のモノである。商売である。しかしながら私は別にそんなに金は必要ない。カスカスに喰えて、何がしかのスタッフを食べさせられたらそれで良い。しかし、私の設計は何周も、何周も遅れる必要がある。今は、まだ遅れ方が足りない。だから、一見前衛建築家風に視えてしまう弱点を持つ。石川淳が狂風記で述べたように、過去へ過去へ、ズーツと記憶の涯よりも過去へ逆行してゆくと、ボツと未来へと出てしまうような、あるいは民俗学者の研究対象になるような超少数民族が、いきなり設計技術を持っていたら、どうするかと想像するような、そんな建築設計をしたいのだ。汽車は降雪の只中、白い吹雪の中を走り続けている。精神障害の子供たちだって、何周遅れのトラックを走っている民族の一員なんだから、まさに私と同じ目的を持つ人々なのだ。昼過、少し遅れて八戸着。新幹線改札口に山崎さん迎えて下さる。今日も又、この辺には稀な豪雪で縁が無い人なのかもしれないと下田町長が言っているとかで大笑い。車でまずは建設予定地を見る。雪景色、雪降る中で説明を受ける。その後、白鳥到来の湖、現白鳥会作業所を見て、昼食。馬肉鍋。白鳥館で袴田下田町長に会って、知的障害児施設ぎんなん寮見学。ほとんど吹雪状態となる。山崎氏の事務所に戻る。大体、建築の構想は頭の中でまとまり、スケジュールの相談を車の中しながら八戸駅へ。十六時四分の汽車で一ノ関へ向う。盛岡ではやてをやまびこに乗り変えるのに四十五分待つ。要するに「はやて」は途中駅は考慮していないシステムなので、途中下車してみようかと考える、私のような者に

は不都合が生じてしまうのだ。新花巻、北上、水沢江差を経て一ノ関着、十八時頃。改札口に菅原の友人である高橋邦夫さん迎えて下さる。ベシーにて菅原と再会。ポソポソと色々話す。三〇年間何も変わらないできたのだからうなベシーは。菅原の化石的宝石ベシーでの生活はまさに民俗学者の、しかも一流の民俗学者の思索の趣きを持っているのである。駅頭に迎えに来て下さったから言うのではないが、高橋さんて人物も実に興味深い。ベシーの客に過ぎぬのだが、客を越えた客で、菅原の物腰と実に似通ったものを感じる。まあ、一言で言えば品格があるのである。菅原の選曲は、私がベシーに居る時は、当然私向けになる。今日は、ジョン・コルトレーンのスターダストで終るかなと思つたら、ツアラストラが繰り出されてまことに良かった。ベシーに時々来れるように八戸の仕事は手を抜かずをやってみよう。菅原もあとせいぜい二〇年頑張ればもう良いだろうが、ラストベシーを何処か森の中の草原に建ててあげたい。トロントで食事をして、ホテル「倉」一ノ関に一前に戻る。